

文化庁日本語教育大会＜第3分科会＞

2017.8.27

「ライフステージに応じた日本語学習を支援するには

～成人の学びの在り方を考える～」

ふれあい館識字学級～在日高齢者事業へ

＜次世代につなぐ想い＞

●おもいはふかく

●一字一字におもいをこめて

社会福祉法人青丘社

川崎市ふれあい館（受託）

1. 受託団体 社会福祉法人青丘社



- 在日大韓基督教川崎教会を基盤として桜本保育園の設立(1969年)
 - 在日コリアン二世と日本人市民による地域活動
 - 「民族差別をなくし、共に生きる地域社会を！」
 - “本名を呼び、名のる活動”
 - 子ども会活動
 - 学習支援・進路保障
- <学生ボランティアとしての出会い・1976年>
- * 民族差別と貧困の実態の中で..**
- 学童保育(留守家庭児ホール)の民間委託実施(1976年)

2. ふれあい館の設置目的



1988年6月14日 開館記念式典

日本人と韓国・朝鮮人を主とする在日外国人が市民としてこどもからお年寄りまで相互のふれあいを進めることを目的としています

(川崎市ふれあい館条例)

- 「桜本こども文化センター」としての児童館機能と
- 「ふれあい館」としての社会教育機能を併せ持つ**統合施設**

3. ふれあい館設立の背景と社会教育事業

- ・1986年「川崎市外国人教育基本方針
—主として在日韓国・朝鮮人—」

＜学校教育：ふれあい教育推進＞

＜社会教育：人権尊重学級、日本語識字学級＞

- ・1988年川崎市ふれあい館開館、
社会福祉法人青丘社運営

＊在日の課題のみでなく、高齢者、ニューカマー、障害のある人の課題、マイノリティの視点を見据え、個別性尊重の実践

- ・識字学級

＊在日韓国・朝鮮人1世の識字実践

＊国際結婚をしたフィリピンやタイの女性たちの相談

4. 川崎市(ふれあい館がある)は外国人集住地域

- ・川崎市住民総数 1, 489, 477人(2016年10月)川崎市住民総数226, 497人
- ・外国人総数 35, 099人(全体の2. 3%)
- ・川崎市外国人総数 13, 065人(外国人全体の37. 2%)
- ・川崎市住民総数の外国人の割合(5. 7%)
- ・日本語指導を必要とする児童生徒(2016年1月)
 - ＜小学校＞全市 102人、川崎市 50人(49%)
 - ＜中学校＞全市 62人、川崎市 27人(43%)

* 川崎市南部、ニューカマー外国人に多い就労場所

- ・24時間稼働のお弁当工場(夜勤型)
- ・産業廃棄物の処理工場(リサイクル)
- ・食肉工場

5. 統合施設としての特色

川崎市ふれあい館

桜本こども文化センター

(1) 地域福祉コミュニティの中心館

乳幼児～小学生・中学生～高校生～成人～高齢者まで

＊多世代連携・事業：●保育園、子育て支援センター連携

●中高生の居場所づくり ●高齢者交流事業連携

(2) 川崎区における 多文化家族支援

&「貧困の連鎖を断ち切る」こども・若者・家族支援事業

●翻訳・通訳、多言語情報発信●中学生学習支援

＊青少年に寄り添い、いじめをなくし、共に生きる仲間づくり

(3) 川崎市における「多文化共生社会」推進事業

●人権啓発社会教育講座●民族文化講師ふれあい事業

6. ふれあい館「共に！学びの場」



7. 1998在日高齢者交流クラブ「トラヂの会」 在日高齢者の居場所



8. ふれあい館から

高齢者・障がい者の生活支援



- 「帰れない、帰らない
在日コリアン高齢者の
日本のふるさと」づくり
- 「字もかけないし、
日本人の集まる場には
バカにされるから行きたくない」
在日コリアン高齢者

2001 おおひん地区まちなかほっとライン

在日コリアン高齢者の介護支援のための事業所

識字学級 書初め



●学ぶユスンさん

●2010自分史をたどる旅 ＜伊豆・浄蓮の滝＞



●在日コリアン一世の自分史

・2011 作文集

「おもいはふかく」

・2017 自分史

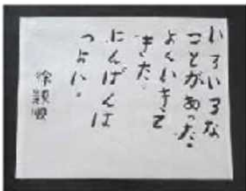
「一字一字におもいをこめて」

いろいろな
ことがあった。
よく生きてきた。

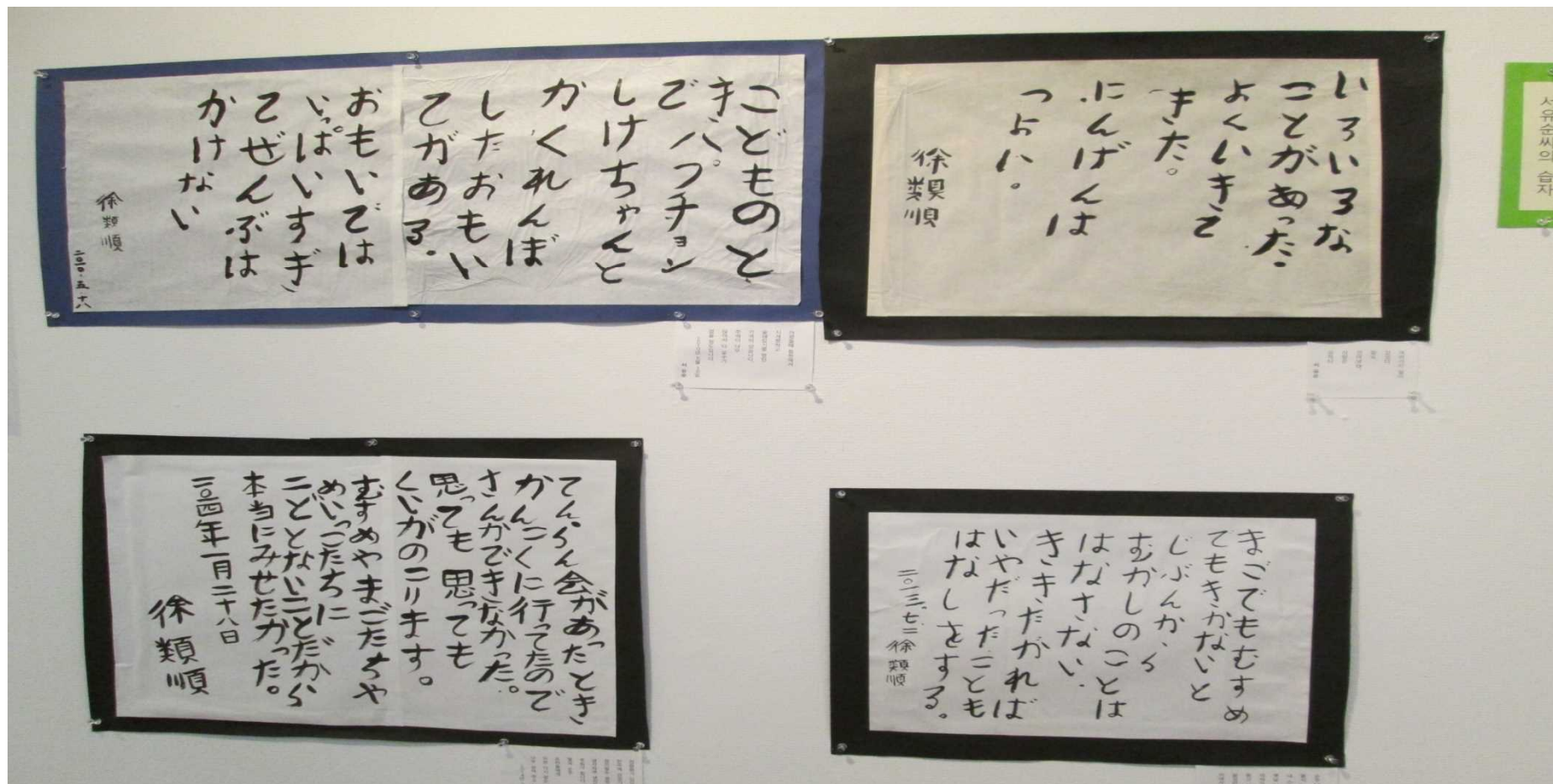
徐 類 順 さん



●1926年、慶尚南道陝川郡に生まれる。14歳のとき、先に渡日し働いていた兄二人を頼って、母と共に日本に来た。日本では五反田に住み、兄は学校に行き、他の家族が働き、生活を支えた。●類順さんは五反田の旋盤工場で働き始めた。その後、生活のためにいろいろな仕事をする。旋盤工場の次は、織物工場。そして、静岡・銀山の重労働。次は名古屋で、家族と共に働く。●18歳の時、兄と一緒にトラックの運転手をしていた人と結婚。戦後、家族・親戚と共に帰国したが、生活が苦しく、母と夫が相次いで死去。仕事を求め、子どもを連れて兄と共に再渡日。以来50余年、川崎で家族のために現場仕事一色の毎日を過ごしてきた。●18年前、70歳、ようやく仕事一辺倒の生活から、幼い頃からの夢だった「勉強」を求め、ふれあい館識字学級に通うようになる。持病を抱えながらも、真摯に学び続け、語り部活動では、在日一世女性の貴重な体験を先頭に立って語ってきた。今回、「子どもや孫に残したい」想いから自分史を書いた。



在日コリアン一世・徐類順（そ ゆすん）さん 習字の作品「にんげんはつよい」



2012「ウリハッキョ作品展」(川崎市教育文化会館)



9. 在日コリアン一世の豊かな老後の保障を！ ～識字学級～交流クラブ～生活支援事業へ

(1) 在日コリアン一世の識字実践

- 渡日50年、戦後40年を経て「初めて、エンピツをにぎる」
- 名前、住所を「始めて書く喜び」

(2) 「共に学ぶ」→「共同学習」の確立

- 身体一つで、厳しい差別を生きてきた生活史
- 在日の生活史「語り部」→つなぐ～歴史の証言

(3) おもいを語る、絵を描く～2011・2017自分史発刊

- 学ばなかった「想い」への表現～発表～発信へ

(4) 世代をつなぐ豊かな老後保障を！

- 識字学級～交流クラブ～生活支援事業